「天の賜は多しと雖も、其の精神は一なり。まつりごとは種々あれ共、皆な同じ主のなす所なり。はたらきは種々あるも、皆同じ神の業なり。」と

觀音に關する此概念は日本國民の品格を作る上に於て非常に大なる力ありしかも如し。吾等日本國民の有する、優しき心は、皆な觀音に負ふ者と云ふも可なり。全國到處に觀音の堂ありて、多くの人民其前に香花を俸げ、念佛祈願せるは、日本を旅行せし人の、常に見る所なり。而して斯く神話的の神を祈るは、或は迷信に過ぎざるやも知れずと雖も、日本人民の多くか是れか爲めに慰籍を得、祝福を得る事、少からざるを思へは、必らずしも一概に排斥し、蔑視すべきにあらず。彼等の單純なる心は、斯く熱心に祈りなは、必らず觀音より救はるへしと思へるなり。宇宙に充ちたる愛の波は、常に人間の心に動きつゝあり。而して情緒一度、他人の苦悶に觸るゝや、直ちに是れに感して、震動し、其震動人間の生命の根源たる觀音の愛に達し、茲に兩者の心情相交通するなり。

更らに一言すべきは、基督教に於ける、聖母マリヤは即ち佛教に於ける觀音菩薩なる事是なり。人間の性質として、其の何れの地の人間たるを問はず、皆なゲーテの所謂「久遠の女性」なる者を要するが如し。基督教かマリヤを作りしは、即ち此要求に應せんか爲めにしてマリヤ其者は歴史的の人間なりと雖も、基督教徒は自己か精神上の欲望を充たすに足る、全ての性質を彼の女に付したり、是れと等しく、佛教には觀音菩薩あり、而して佛教歴史の上に於ける地位如何に拘らず、觀音は充分佛教徒の要望を充たせるものなり。基督教徒より云へば、觀音はマリヤの化身にして、佛教徒の目より見れば、觀音か基督教徒と稱する人間の爲めにマリヤとなりて權化せるなり。時の古今によりて眞理は變せず、地の東西なるか故に人道異るの理由なし。故に余は東西の人民が偶然的の差異、衝突を念頭に措かず、相共に唯一の眞理を尊重するの日來らん事を切望して止まず。

佛教と東洋の文化（一九〇六年シヨーチ、ワシントン大學にて）

佛教の一特質にして、且つ最も東洋の人心に及ぼしたる所大なるは、人生か此世にのみ限られたるものに非ずと云ふ事、即ち是れなり。人間にして、其行爲感情又たは思想が眞理に合し、高尚にして道德に叶ひ、自我的ならざらんか、彼は其思想に於て、感情に於て、將た事業に於て永劫死せざる也。如何となれば、其の何事なるとを問はず、善なり、眞なり又たは美なる者は、宇宙、存在の道理に叶ひ、久遠の生命を得る者なればなり。

佛教徒の理想は、往々西洋學者の誤解する如く、俗世を離れて久遠の靜寂に入（靜に入る）らむとするに非ず。佛教徒は爭を恐れず、戰を厭はず、若し爭ふに足るの理由あり、戰ふの價あらは、此生のみならず、來世の生命をも犧牲とするに躊躇せず。其の目的を達し、人生の理想を實現する迄は、幾度なり共、此世に顯はれ來りて、決して休まず。故に人間は其思想、感情が宇宙の道理と合する限り、何時迄も生存す。佛教徒が久

遠の生命と稱するは即ち是なり。

米國獨立戰爭中なりしや、或は英國にて起りし事なるか、今は充分に記憶せざるも、兎に角に或戰爭の際なりき。一人の陸軍士官、間者となりて敵地に入り、遂に捕はれて絞殺せられたるが、其臨終に於て、彼は「嗚呼悲しい哉、余は國家の爲めに捨つる命、唯一を有するのみなり」と嘆じたり。然れ共嘆すべきは彼が唯だ一つの生命より多くを有せざりし事に非らずして、彼が自己の死により多くの人々に彼と等しき、愛國の情を起さしめたる事實と眞理を知らざりし事なりと云はざる可らず。彼は決して死せず。彼は決して絞殺せられたるに非ず。彼は決して天に昇りたるにもあらず。彼は猶ほ久遠の生を保ち、彼の國家のみならず、米國にも、日本にも、否な三千世界の涯迄も、到る所に在りて萬代の末迄も死せざるなり。

此點より云へば我が楠正成は、確かに此の士官に優りたる者と云ふ可し。彼れは餘り名もなき一武士なりしを以て、若し後醍醐天皇の爲めに見出されずんば、斯る不朽の名を竹帛に垂るゝ能はざりしなり。然るに運命は彼を草木と共に朽ちしめず。

官軍を率ゐて、賊兵を防ぐの勅命を彼の上に下だしぬ。其時、彼の兵は賊の勢に及ばざる事、遙かに遠かりしを以て、彼れ自ら策を献して敵を破るの手段を講じたるも如何せん頑迷なる朝臣の爲めに、斥けられたり。自己の策用ゐられざる正成は、其時既に今度の戰が敗に歸すべきを知りつゝも、猶ほ全力を盡し己むを得ずんば、命をも捨てんと決心せり。然るに日至るや、敵はかねて彼の期したる、策に出でたれば、最早如何ともするに由なく、唯だ一時たりとも、長く其進路を喰ひ止めて、帝の無事に都を落させ玉はん事を望むの外なく、奮鬪、力戰幾度か敵を斥けたるも、敵は身方に優る幾倍の兵を有し、我は地の利惡しく且つ既に身に多くの傷を負ひければ、最早や是迄なりとて、各將を集め、此世を去るに望みて何事か思ひ殘す事なきやと尋ねたるに、彼等は力の有らん限りを盡くして、戰ひ、義務をも果たしたれば、此期に及んで何の望む處もなしと答へぬ。之れを聞きたる正成は聲を勵まし、されど余は七度人間に生れ來て、朝敵を亡ぼしたし」と云ひ終るや、刀を拔き、一族主從互ひに刺し交へて死したりと云ふ。

基督教信者が此話を聞きて、如何に感するやは余の知らざる所なれ共、吾々佛教徒は此話を聞く度毎に、實に深き感に打たれ、大なる宗教上の意味あるものと思惟す。勿論吾々が幾度人間に生るゝやは、其數を定むるの限りにあらず。人間にして實現し、保存するに足るの思想、又たは感情を抱きなば、此の事業を完ふする迄は、吾は幾度にても生き還り、地球の終る迄も止まざるなり。吾人にして唯だ萬物の道理に叶ふ事たに爲さば、其事業(世界の道理を實現したるに外ならざる其事業)の完たき迄は幾代にても、必らず之れを實行する人間を生ずべし。此の肉體即ち此思想感情及び希望の一時集りて成りたる者は、消ふる時あり、決して永劫に存ずべき者に非らず。如何んとなれば、人間は世界の靈が自分の目的を達する爲めに、用ひたる手先きに外ならず。世界の靈にして、手先なる人間の衣を(肉體)更へんと欲せば、直ちに之れを更ふべく、「光あれ」と云へば直ちに光あればなり。

故に個人の人格を不朽ならしめんとするが如きは、佛教徒の事にあらず。隨て斯る誤りたる不滅を得ん爲めに、理屈を作るも亦た然り。正しと思ふ事を爲し、誠實に之れに盡さば、事業は自然に出來る也。不滅を求むると、求めざるが如きは、何等の關する所にあらず。正成が最後の一言は、諸將をして彼等のなしたる事業の眞味を、完全に知らしめん爲め、自己の信する處、感する處を吐露したるに過ぎずして、決して必らず七度人間に生るの意味にも、又たは正成自身の個人を永存せしめんとの心にもあらず。彼れの意味は彼れの事業が、彼の美はしき例に感じて起り來たれる崇拜者、子孫、摸倣者、弟子又たは友人によりて實行せらるへしと云ふにあり。而して彼れの言は、吾人を欺かず、彼れ死して後、忠臣義士は陸續として出で來たれり。見よ、日露戰爭に殉したる多くの忠勇なる將卒は、我等日本國民の最も愛する正成の權化にあらずや。彼れは是等の勇あり、義ある兵士の心に於て彼れ自らを見出したる者と云ふ可きに非らずや。彼れは彼れが曾て計畫せし事を、實行する爲め、是等日本兵士の精神的導者となりたるにあらずや。誰れか、正成は湊川に於て戰死したりと云ふ者ぞ。彼れは我忠勇なる國民の心に生きつゝあるなり。否な、一の國民たらむとする心ある者の內には、正成猶ほ存する者と云ふべし。

廣瀬中佐が閉塞隊員として、旅順口に向ひたる時も、亦た正成と同じ感を有したりき。是れ中佐に有名なる二句の詩ある所以なり。即ち中佐は事業の不朽を信じ、自ら其事業に權化せり。中佐の詩に曰く、七生報國、一死心堅、再期成功、含笑上船、と。嗚呼、正成六百年の昔に死したるも、其思想は決して彼れの屍と共に朽ちずして、今又た中佐の詩中に表はれ來たりしなり。否な中佐のみならず、海陸に死したる我が勇士は、皆な正成の思想の權化なりしや疑なし。唯だ中佐は之れを詩に吟じ、他の將卒は默して語らざりしのみ。彼等の心に何の區別あるにあらず。否な若し然らずんば、彼等焉んぞよく、斯く眠るが如く笑つて死地に就くを得んや。

斯く言へば、世或は余を評して、宿命論者なりとなす者あらん。然れ共、少しく頭腦明晰なる者は、余の說く所が決して、宿命論に非ずして、人生の意義に希望に充ちたる解釋を與へ、善が最後に於て惡に勝つ事を確信し、高尚なる思想、價ある事業、淸淨なる感情、―人類を結合して同胞の情を生せしむる或物―と自己とを一致せしむる限り、個人は何時迄も生存する事を確信したるに過ぎざるを知るべし。世の事物を個人主義の眼孔を以てのみ見る徒は、到底余の說明の意味を解する能はざるべし。併しながら、吾人が如何に個人の存在に執著するも、萬物を包有する或者の心が、吾人の欲する如くならずんば、吾人は此の不可解の力の命の儘に其力をして吾々個人の如何に關せず、唯だ其れ自身の目的を達せしめさる可らず。吾人は之れを如何とも爲し難たき也。彼シユライエルマツヘルが宗教を定義して絕對的依賴の感情なりと云ひしは、正さしく、各人の心の底に存する一種云ふ可らざる感覺、即ち直覺的に吾々個人の弱くして、超個人的實在又たは力と一致する事に於て非常なる力を得る事を感する、感覺)を說破し得たる者と云ふべく、此事の內に何等宿命的又たは妄想的なる點あるを見ざるなり。

眞の佛敎徒は無我の眞理を確信し、個人其著の價の至高のものに非ざるを知る、故に彼等は死に臨むで少しも亂さず、靜かに天命を待てり。斯く人生を全たく個人的眼點より見ざりし事は、日本軍人の武士道を發達せしむるに、非常なる功ありしなり。されば日本往時の武士、貴族及び文學者の如きは、皆な生死の境に有りて之れを

知らざるか如く、却て喜々たる者ありき。之れを基督教徒の死に當つて、神に祈るに比すれば、實に雲泥の差あるなり。太田道灌聞者の爲めに刺され、身に重傷を負ひて、地に倒れ、執るに武器なく、防くに力なきに至りし時、一人の刺客進んで刀を其咽に擬し、言置くべき事無きやと尋ねたるに、道灌平然として答ふるに左の歌を以てせり。曰く、

かゝる時さこそ命の惜からめ、かねてなき身と思ひ知らずは、

佛教徒は、人生を斯くの如くに解して、心の平和を得たるを以て、彼等の社會上に於ける地位の如何を問はず、必要の場合には、皆な身を犧牲に供するなり。是れ實に彼等か現在の身は死し、父母故舊と別れざる可らざるも、同時に精神的に久遠の生を保ちて、常に其故舊と相交通し、決して寂しき地に獨り行くに非ざる事を知るか爲めにして、佛教か日本の文化に貢献せしは、實に斯く人生の高尚なる意義を傳へ、死に對する高尚なる解釋を與へたるが爲めなり。

佛教徒は吾々個人か互に相分るれば、「余」は「余」に非らず、「汝」は「汝」にあらず、「汝」あるが故に「余」あり。「余」あるが故に「汝」ある事を信ず。而して此觀念は佛教道德の根本を爲せる者にして、隨て最も重要なる者とす。蓋し佛教は無制限に個人主義を主張するを以て、智なき業なりとす。多くの人は、個人を以て最終の實在にして、其自身に存在し、他の者とは全たく關係なき者なりと想像し、自己の利益を犯さゞる限りに於てのみ、他人の存在は許容すへしとなせり。故に彼等は先づ個人主義の城廓を築き、如何なる代價を拂ふても、之れを護らんとす。惟ふに彼等は個人主義滅べば、世も又た亡ぶものなりとなすなり。

然れ共、東洋の思想は、全く是れと異り、先づ個人を拒絶したる、或物の上に立脚地を求め、總ての有限の事物を包有し、宇宙の運命を定むる或者を考量し、次きに相對的條件の世界に入りて、地球自らも其れを支配する者の意の儘に何時かは亡ぶ時ある事を信ず。換言すれば、個人を包含する全體は、永久に存するも、個人其者は決して永劫存在する者に非さる事を信ず、故に東洋の道德より云へば、個人の運命は如何になるも、全體を保存する事を以て、非常に重要なる事ゝなせり。例之ば我國が強敵

の爲めに脅されたる時、余は其必要に應じて、余自身の有する者は、身體たると、財たるとを問はず、皆之れを犧牲として國家の名譽と、安寧の爲めに盡すべし。之れを稱して愛國心と云ふ。

我が父母は老て、自ら扶養する事能はざるを以て、余は全力を盡して、彼等を勞たはり、老後の寂しさを慰籍せんとす。余をして今日あらしめしは、父母にして、父母は我が爲めに、如何に苦み、如何に心配せしやを知らず。余をして全體の安寧と、全體の保存の爲めに盡さしむるに至りしは、皆な父母の賜なり。之れを思ふ時、余は父母に對する感謝の念に堪へず。全力を盡して父母に深切を盡さずんば已まざらんとす。是れ即ち孝の心にして、師に對する時も、友に對し長者に對し家内に對する場合も、又た同樣なり。之れを要するに東洋の倫理には缺點多かるべしと雖も、東洋倫理をして特に他に卓越せしむるものは、愛國心を重し、孝心を貴び、忠實にして、自我の念を捨る事に重きを措けるにありと言さる可らず。

鹿野苑の話

昔し印度、波羅奈斯の王或る林中に入りて獵を爲しつゝありし時、二つの鹿群に出逢いたり。其鹿群は各々五百頭の鹿より成り、各一頭の首領之れを率ひたり。先達たる一頭の鹿は、七寶の色もて彩られたる美しき、鹿にして、是れ菩薩釋加牟尼佛の前身の一なり。他の首領は即ち提婆の前身なり。鹿となれる菩薩は、多くの鹿が王の狩の爲めに殺さるを見て、非常に悲しみ、其の大仁慈の心は遂に殘虐を見るに堪へず、自ら王に謁して今一層殘忍ならざる樣せん事を乞はんと決心し、霰の如くに飛び來る箭を物ともせず、王の側に至り、王に向ひ、臣は御身の我欲を充たさん爲めに、何の罪もなき我同類の者の多くが殺さるゝを見るに忍びず。若し強いて鹿の肉を望まるゝならば、吾々兩群より、交互に日々一頭つゝを献すべければ、何卒皆の者を一時に殺すが如き殘酷なる事を止められ玉へかしと願ひたるに、王は遂に之れを諾したり。

斯くて日々一頭の鹿を献しつゝありし程に、一頭の仔牝鹿選まれて王に献せられざる可らざる事となりぬ。然るに件の牝鹿は己の死は厭はざるも其子を暗から暗に埋る事の恐しく、不憫に堪へずして、其の首領なる提婆の許に至り、其旨を告げ何とかして王との約束を破らず、且つ己れの命をも助くる方法はなきやと哀願せり。然れ共冷酷なる提婆は、命の惜しきは誰も同じ事なり。生きたる者は皆な出來る限り長活せんと欲する事是れ世の常なり。汝自身に番が當りしものなれば、最早いたし方なし、去れ、最早何事も口説かざれ」とて言下に其乞を斥けぬ。牝鹿は王なる鹿の荒々しき言葉の無理なるを思ひしも、せん方なければ、益々悲みしか、不圖思ひ付きて菩薩の所に至り、事の由を語りて助を求めたるに、菩薩は牝鹿に向ひて提婆の意見を聞かれしかば、牝鹿は、我が王は少しも不憫と思喰さず、何の理由もなしと思はるゝに、酷たく怒り罵り玉ひたり。併し慈悲深き御身なれば、必らず助け玉はるべしと思ひて、部下ならざる身をも顧みず、御智恵を借りに參りし次第なり」と述べたり。之れを聞かれたる菩薩は、非常に不憫と思され、嗚呼、此の牝鹿を殺さば、其子も共に殺さるゝ譯なり。されば、とて代りを出すは、道ならぬ事なれば、此場合に牝鹿も殺さず、其代りとなりて王との約をも破らざるは、唯だ吾れ一人なり。故に今度は吾れ犠牲となるべし」と覺悟を定め玉ひて、王の所に行きぬ。然るに王は之れを見て、「何故に來りしか、最早や鹿は盡きたるにや」と尋ねたれば、菩薩之れに對へて曰はく「王の仁恵深きは世の人皆之れを疑はず。而して王の命は誰とて背くものなしと雖も、悲しい哉、吾等の同類は爲めに絶滅せんとす。臣は今日はからずも其事實を發見して、實に悲しみに堪へず。若し犠牲となるべき者の順序を更ふれば、始めの約束に背き、さればとて此の牝鹿を助けされば、人情に反す。是れ自ら參りし譯にして、命は短かく萬物皆な常なきに、何とて生ある間に仁慈を行はずしてよからんや」と。王は之れを聞きて非常に感動し、「實に吾こそ獣なりしよ。吾れは人の形する鹿なり。汝こそ動物の形をなせるも、其心は人間なり。人と動物との別は、形にあらずして其心にあり。形は獣類なるも、心だに仁慈に富めば人に外ならず。余は今日より肉食する事なければ、安心せよ」と答へたりと云ふ。此森を鹿野苑と稱して鹿の住むに任せたるは即ち

是れが爲めなり。

玉探しの話

昔印度に一人の王あり、一の貴き寶石を持ちて、非常に之れを大切にせしが、或時其近侍の者、誤つて此寶石を庭園内の深き池中に取墜したれば、王は大に心を痛め、誰にても玉のある所を探りて、之れを取返したる者あらば、良き褒美を與へんとの命を出せり。然るに王の召抱人の中に「明眼」と稱する一人あり、其眼力世に絶するを以て、人々此者ならば必らず玉のある所を見分け得べしとて、之れを呼び出して玉を探さしめたり。明眼は命の儘に、直ちに水中に潜り入りて、探り索めたるも見る事能はず、努むれば努むる程、益々眼力弱りて、其甲斐無く、己れの眼力弱き事を始めて悟り、失望して上り來り、王に其由を告げたるに王も亦た非常に失望せられたり。王は最早やせん方盡きたれど、さればとて猶ほ諦め難ければ、取出の方法に付き種々協議を凝したるも誰一人として妙案を出す者もなかりしが、失望の極、最も奇妙

なる寧ろ滑稽に近き一策を案し出せり。同じ王の臣下に無眼と稱する者あり、明眼にして用を爲さずんば、此無眼なる盲者こそ却て良からん、兎に角に盲者を用ゐたるが故に、却て惡しき事はなかるべし。世には盲目の者が、種々不思議なる事を爲したる例少からず。されば今度も此盲者が或は意外の成功を爲すやも知れずとて、之れを代りに用ゐたるに、件の盲者又た命の儘に水中に入り、間もなく玉を手にして上り來れり。之れを見たる王は非常に打ち喜びて、多大の賞を與へたりと云ふ。

此話は宗教上の「眞理の玉」を得るは、世人の想像する如き、利巧なる學者にあらずして、純潔なる精神を有する者なる事を、斯る譬を用ゐて說明したるものなり。

一句の偈の犧牲

佛、印度王の王子となりて此世に生れ玉ひし時、萬物生存の眞理を悟らんとて、印度の習慣に倣ひ、世を避けて山に入り、深く瞑想に耽り玉ひ、人生は不幸なり、人生は苦痛の連續に外ならず。如何にせばよく此不斷の苦を遁れ得へきぞ。全智を得、不朽の

命を得て、完全なる幸福に達するに非ずんば、此世に來たりて幾度も人生を繰返す必要なし。生存の根蔕を究めて、無智の呪を去るに非らずんば、人生は何の益なきに非ずや。故に余は悟を開き、久遠の命を得るに至るに非ずんば、此の菩提樹下の坐を去らざるべし。余は精神上の全力を盡して、此目的の爲めに働き、若し幸にして其目的を達しなば、決して其精神上の幸を已れのみ恣にせず。必ず之れを世の人々に說き訓へて、彼等を悟らしめ、彼等にも其幸を分つべし」と決心せられたり。斯くて或る夜半、萬籟聲を靜め、佛又た其默想に餘念なかりし時、忽ち何所よりともなく聲あり、其の聲人の聲と異り、明かにして、身に浸むが如く、四方に反響し、宇宙は皆此聲の反響に充ちたるが如し。而て之れに耳傾くれば、其聲は實に左の如き二句の偈なりき。

諸行無常、是生滅法

佛之れを聞かれたる時、忽ち其精神は一道の光明に照され、自ら何となく神々しく、天にも昇るが如くに感じ、其心は擴かりて、宇宙に充ち、何とも言ひ難き愉快を感せられたり。然るに眼を上げて前なる谷を見れば、こはそも如何に、恐ろしき怪物は佛を睨めつゝ立てるなり。佛は大に驚きて、何故斯る怪物ありて已れを睨めつゝあるやを思ひ惑ひ玉ひぬ。

怪物は即ち夜叉にして、其の目は炬火の如く、爛々として光り、其口の血醒き樣の恐ろしさは、又た譬ふる物なし。然るに何ぞ測らん、佛の心を感せしめたる偈は、此の怪物の口より來りしものならんとは。併し此偈の爲めに、心を奪はれ居る佛は、此の歷を見たるが爲めに、一つも其心を亂し玉はず。此の世か無常なりとの事を說きたるのみにて、未だそれより遁るゝの道を說ざるを以て見れば、此の偈は未た全たき者に非らず。必ず猶は是れに附加すべきもの有るに相當なし。吾々人間が業の因果律の爲めに、束縛せられて若しむは、生存の眞意義を解せず、生死の絆を破り得ざる爲めなりとて、夜叉に向ひ、今爾の誦したる偈は、實に美しと雖も、未だ完たき者にあらず。されば何卒殘れる二句を敎へ呉れよ。こは吾れ一人の爲めにあらず、人間全體の爲めなれば、是非とも殘れる二句を誦し呉れよ」と乞はれしに、惡魔對へて曰く、「喜んで乞に應ずべけんも今は身飢え之れを誦するの力なし。吾れは人肉を食ふ者なり、

故に若し先づ吾が望みを充たしなば、御身の乞を容るべし」と。佛又た彼に向ひ「余は何時にても余の身を犧牲に供すべきも。若し余死しなば子孫の爲めに此偈を傳ふる者なし。然る時は眞理は永遠に棄たるなり。されば何卒余が死する前に殘りの句を誦し呉れよ。余はそれを石に刻して後の世に遺し置くべし。それだに終らば、余は喜んで我身を汝に捧くべし。石に遺れる偈は、何時か人の目に入り世に擴まりて、人間を悟らしむべければ」と。哀願せられたるに、彼又は「さばかり迄に熱心ならば、願を入れて進ずべし聞かれよ」とて。

生滅々已、寂滅爲樂

との二句を誦しぬ。怪物が此を誦し終るを待ちて、佛は自ら一指を傷け、其血にて此偈を石上に記し、終つて約の如く身を躍らして崖より落たるに、今迄の恐ろしかりし怪物は、俄に貌を變じて、帝釋天となりぬ。帝釋天とは天の神にして、佛敎を護る天使なるが、佛崖に落ちて不思儀にも、此神の手に救はれ玉へる時、天より花降り、宇宙は美妙の音樂を奏しぬ。

佛敎より見たる戰爭（一九〇四年「オーンコート」所載）

「此三界は我物なり、一切の物は我が子なり、感情ある者も、有ざる者も、生ある者も、無きものも、有機物も、無機物も、此世の萬物は、吾れ自身の反照に外ならず、萬物は皆な一の源より來たり、一の體を分有す。故に如何に小き者と雖も、皆其所を得るに非らずんば、余は決して休む能はず、此事業を全ふするには永劫迄かゝる事あるも、そは余の意とする處にあらず、萬物皆な無窮の愛を得て、平和に樂しかるべき永劫の末迄も、余は働くべし」とは、佛の覺悟にして、吾々佛に隨ふ輩は、唯た佛の護を得て進むべきのみ。

然らば何故に人間は戰ふか、吾々人間が未だ宇宙の眞想を解せず、世には多くの惡人あり、頑迷なる思想を有する者あり、邪念を有する者、全べて無智より來たりしあるが爲めなり。故に佛敎徒は常に無智より起りし者と、戰ひて之れを伏せざれば止まず、人間の不幸の原因となるべき者は、全べて之れを絶つて、決して假籍せず、之れ

が爲めに其生命を犧牲とするも恐れず、肉體が生れては死し、死しては生るゝ毎に、更らに戰ひを始めて、目的を達せざれば止まざるなり。

然れ共、諸佛及び菩薩は、共に皆敵を憎まず、敵に對して惡意を表するか如き事なし。善者の敵は惡しく、欲深く、恥を知らず、殊に無智なりと雖も、然かも、彼等も亦た同じく佛の子ならずや。故に之れを憫れみ之れを悟らしむるべきも、決して迫害すべきにあらず。故に佛敎徒の流したるものは血にあらずして、(不幸にして世界の宗敎の歷史は血を見たる事多きも)慈悲の心より出でたる涙なりき。佛敎徒等が頑迷なる佛の子等と戰ふに當りて用うる最も强力なる武器は、無我の實行なり。而して此武器の効力は他の殺伐なる武器よりも、遙に大なりき。

佛の菩提の樹下に坐して、萬物の無我なる事に付きて瞑想を凝されし時、數千の惡魔來たりて其心を亂さんとせしも能はず。却て彼等の放ちし箭は花となり、鯨波は極樂の妙音となり、惡魔の軍は、天使の群となりたりと云ふ。然れ共、是れ何等の不思議あるにあらず。全く自我の念なく、慈愛の心に充ち、無限の祝福を有する人には、何者も反對する事能はざるなり。而して此佛の例こそ即ち佛敎徒の倣ひて、以て師とすべきものにして、如何なる職業に就くも、常に我の念なく、自己中心的思想を起すべからず。國家の爲めに戰場に行くも、決して敵を憎む可らず。常に無我の眞理を實行し、敵の命を奪ふも、互の自我が戰爭しつゝありと思ふ可らず。佛敎より云へば、人生の意義は決して、現世にのみ限られず。個人の意義を過大視するは誤也。個人は絕對にも、獨立せるものにも非らず。無限なる佛の愛と結ばれたる時、始めて個人は宗敎上、及び道德上の意義を生ずるなり。如何んとなれば、其時は最早や、自我の念に充ちたる格段の個人にあらずして、愛其內に充ちたればなり。個人は今や變じて、一の全たく自我を離れたる無限の愛の表顯となりたればなり。故に若し彼等にして國家の爲めに戰ふ事も、あらば、(現世にては戰爭は避く可らず)利己主義の爲めに生ずる我欲の念を忘れて、戰はざる可らず。否な佛の慈愛に心を充たしめ、自他の念以上に超絕して、銃取る手、敵を狙ふ眼は、個人の者にあらずして、斯る無常の物以上の或者の機械となり居る者なる事を思はざる可らず。故に戰へば必らず全力を盡し、全

心を傾けて戰ひ、戰場に於ては常に已れを忘れざる可らず。

佛が構成的なる愛の貴ふべき事を說かれたると同時に、又た解剖的智力の缺く可らざる事を、忘れ玉はざりしは、即ち佛敎の特質とも云ふべく、佛は萬物を我が子なりとて愛し玉ひ、其同情は決して誰彼の別なかりしも、又た世には善人と惡人とあり、罪なき者と罪有る者とある事を見通し玉はざりき。勿論斯ればとて、佛が或る者を多く愛したりと云ふにはあらず。善人は其愛を多く得能ひしのみ。同し雨は草木の上に降るも、之れを吸收するの量は草木によりて同じからず。佛の愛は不偏なり、普遍なりと雖も人間の心は其業により、各異るを以て、佛の愛を受くるは、各人に於て同一にあらず。佛は人間の運命を知り玉ひて、絶へず之れを救はんとせらるゝも、人間は之れを知らざるなり。之れを要するに、世に一の眞理ありて、之れに到達するの道多きため、或は時に相反するが如く、相衝突するが如く、見ふる事あるも、靜かに時の至るを待たば、惡は又た善となるなり。

南山の役（「オーブンコート」より抄錄）

唯だ筆紙にも盡し難しと云ふの外なく、實に人生に於ける酸鼻の極にして、其慘憺たる樣は、佛の見られたる阿修羅と帝釋天の戰も之れには到底及ばざるべし。

唯だ見れば何等の異變も無く、左に大連灣あり、右に金州灣ありて、澄める事鏡の如く、南山は頭上に聳へて、露軍の城砦前に高しと雖も、空は嚴に澄み渡りて、何等斯る慘劇演ぜられつゝありと見るべき者なし。大砲の音は彼方に轟き、爆彈破裂の音聞ふるも、其の何所より來るやを知らず。唯た般々たる響の平和なる四邊の光景を驚かすのみ。然るに一度望遠鏡を取りて之れを見れば、山腹は死傷者を以て埋まり、兵士は屍を超へて進み、山上の敵又た或は飛され、或は倒れ、其慘憺たる身の毛も立つばかりなり。然れ其實際其の戰場を踏査するに及んで、更らに驚かれぬ。昨日遠方にありて望見したる時には、其景色の美と、砲聲の壯なるに、感興を惹かれたりしも、現在其所に來り見ては、恐ろしく慘憺たる遂に忘る可らざるものあるなり。

靜かなる夏空の下、美しき景色の中に立つ余は、如何にしても斯る酸鼻の極なる慘劇が、此所に演せられたるを信じ能はざりき。其對照の如何に甚だしきよ、最も樂しき光景の中に、人生の酸鼻の極なる不幸は起りしなり。此に於て余は釋迦の教へを思ひ浮べぬ。

佛教に於ては、終局の眞理に達する門二つあり、一に慈悲(愛)の門にして、他は般若(智識)の門なり。前者は吾々を格段の世界に導き、後者は人間を絶對界に導く。智識によりて靈的悟の絶頂に達し、愛によりて同胞の不幸と罪を救ふなり。平等と、不滅なる宗教上の立場より、萬物の變化を見んか。萬物は皆な一にして、同一平面にあり。故に敵と友とを分たず、戰爭と平和とを差別せず、情欲と悟を分たず、悲劇と喜劇とを分つが如き事勿れと訓へられたり。而して余は之れを知り、余が心は哲理的安靜を得て、涅槃を感じ得たりき。如何となれば、未だ世に佛の榮光を顯さゞるものあるを聞かず、全ての物皆な佛の榮光を顯はせばなり。然かも如何せん余は斯く悟りながらも、此光景を見たる時、苦痛を抑へ難く、人間に對する愛情は、智識の力にて如何とも

する能はざりき。

然らば何故に此の恐るべき戰爭は起りしか。溫き心あり、血ありし兵士は、今や木石の如く地上に横はりつゝあるにあらずや。

嗚呼、母なる地球よ、是等の我が同胞も亦た、地球自身と同じ者にて作られたるに非ずや。加之此等人間の生命は、單に土地の如きものならざる、否な全く異りたる或者を有するに非ずや。彼等は皆な平和と、悟りの事業に盡し得る、人間の精神を有せしに非ずや。無限の價ある貴き人間は、今や地球の上に横はりて土石に歸せんとしつゝあるに、默せる地球、嗚呼汝は何等の情なきか。

此世に於て人間の爲し得る、最も高尚に、最も大なる事業は、邪惡と戰いて之れを降すにあり。佛が二十年間の修業を積み、四十八年間之れを說きたる道德上の主義も、亦た實に此降魔の外にあらず。常に人間の心を苦しむる八十八の大魔を退し、四萬四千の小魔を破るは、即ち佛の主旨なるを以て、佛教徒たる者は皆愛の大船を造りて、之れを生死の大海に浮べ、信仰の櫂により、硬き決心を持つて、我欲と欲情の荒波

を凌きつゝあるものにして、同胞人間を涅槃の彼岸に送る迄は、決して心を許す可きに非らず。

戰爭は罪惡なり、然かも最も大なる罪惡なりと雖も、惡魔との戰は飽迄之れを續け其の目的を達して後に止むべきものとす。日本が止むを得ずして始めたる日露戰爭は、決して利己的目的の爲めに非ずして、平和の敵たり、文明の仇たり、且つ悟智識の)の敵を伐たんが爲なり。戰爭の重且つ大なる事を知るが故に、日本は先づ之れを熟慮したる後、遂に武器を取りたり。自ら正義を有すと自信するが故に、非常なる勇氣を生じ、如何なる險難を冒しても勝たされば已まず。而して其理想を實現する爲めに、幾千の兵士の血を流し、骨を晒すに至りたるものなり。故に吾人は非常に決心を固め居れり。然れ共猶ほ此の慘憺たる光景を見ては、心慄かざる得ず。然かも、今後の犧牲は、如何に大ならん。露國自身が負ふ傷害は、言はすもがな、敵が邪惡の念を有するが爲めに、今後生ずべき我が傷害や如何に多からん。個人として何等の罪なく戰爭には全く責任なき、多くの不幸の兵士は、非業の死を遂げざる可らざるなり。

若し人間をして、清淨なる精神に入らしむる、佛の愛の教へなくんば、斯る慘憺たる光景を見る時、吾々は殆ど自ら慰むる能はざるべし。若し斯る慘憺たる兵士の屍より、眞の精神的光明輝き來たる事を信せずんば、一目たりとも此慘憺たる樣を見る事能はざるべし。若し是等の犧牲が、利己的目的の爲めに捧げられたるに非ずして、悟を終局的に實現するに於て、止むを得ざるが爲なりとの慰籍無くんば、余は眼前に此世乍らの地獄を見る事能はざるなり。身體は其自身よりも一層偉大なる、或物を容るゝの器たるにすぎず。個人は一層永久なる或物を容るゝ殼たるのみ。故に吾々は人情を失はざる限りに於て、飽迄も此の苦に堪へざる可らず。余が此所に來りしは、人生に於ける最も慘憺たる戰場を見て、自己の信仰を驗すと同時に、能ふ可んば勇敢なる日本軍人の爲めに、高尚なる佛教の教理を說きて、彼等をして、大なる且つ高尚なる事業の爲めに死する者なりとの念を抱て、瞑さしめんとするが爲なり。而して余は此目的の爲めに、最善を盡したりと信ず。余が戰地に於ける感想は、戰地にて作りし詩中の一なる次の一首にあり。

占領虎山麓後峯、貔貅三萬勢如龍、
敵前有個優游處、破戰方酣午睡濃。

日露戰爭に於る戰死者追吊の席に於て（一九〇五年桑港金門會堂にて）

私は今夜此席にて日露戰爭―漸く終はりたる近世の大戰爭―に斃れたる我兵士に關する一場の演說をせよと云ふ御依頼を受けたので御座います。併し私は何を申上ましたら宜ろしう御座いましよう。彼等の死の榮譽を賞贊致しましようか、言葉に盡し難い戰爭の有樣を述べましようか、それ共日本海陸軍の勇氣と大膽とを賞めましたら宜敷御座いますか或は內地にある遺族共の慘狀を申上ぐべき者でしようか。私は決して所謂辯士と云ふ資格のある者では御座いませんから戰爭の有樣を說ひたり、死の勇ましかりし事を賞める事は出來ません。唯だ私は全々宗敎家の立場から、是等兵士の死に付て、私の意見を述べ、若し出來るならば、死したる兵士の靈を慰め、後に遺りし人々の爲めに、靈魂の不滅とは、死後個人の人格を持續する（若し出來るとしても）と云ふ事では無くして、高尙なる行爲をなす事によりて、得られる事を申上げたいと存じます。

單に戰爭に關する、抽象的の話をする時には、皆其良き方面のみを考へ、壯烈な事や勇ましい事や、忠君、愛國心の事や、のみを考へて、其れが爲めに拂ふ代價を忘れ、其理由の何たるを問はず、人を殺す事が罪惡であつて、我々が生存せる目的は、人を殺す事でなくして、之れを救ふ事にあるを忘れ、戰爭が人生に於て最も悲慘なる事である事を忘れて居るので御座います。吾々が此世にある目的は、四海同胞の理想を實現し、永久の平和を得る爲めではありませんか、御互に助け合つて、一般の幸福を增す爲めではありませんか。宇宙に一つの大なる家庭を作り、相敬愛せんが爲めではありませんが、然らば戰爭は少しでも此目的に叶ふ者でありましようか、人間の樂しみを增す者と云ふべきもので御座いましようか。互に相敬し、人間を殖す所以て御座いましようか。若し然りと御答へになる御方があれば、私は滿洲に於ける大激戰の一に付て、直接戰爭の何たるかを公平に見られん事を望みます。大激戰地の一とは旅順口の事でありまして、同地にては昼夜戰ひ絶えし事なく、或は取られ、或は奪ひ、一の堡壘も幾度か双方の手に落ち、攻め行く中隊も、行く中隊も、皆な敵の彈雨の爲めに斃され、彈丸を免かれたる者は又た刀に刺され、彼我の死傷者は山を覆ひ、其の或る者は將に絶命せんとして悶へ苦しみ、又た或者は痛みに堪へで呻り、今少し前迄元氣に動きし兵士は、今や石の如くになつて、横つて居るので御座います。皆さん、無慘の最期をとげたる是等の兵士は、皆な實に雄々しき心を有し、高尚なる精神を持つて居つたのではありませんか。夜に入り月上りて青き光を此光景の上に投じ、夜は靜にして四面聲なき時の樣に至ては、日中よりも一層甚だしいのであります。此れは話ではない。實際私が經驗した者で御座います。

然らば是等の兵士は、何所から來たので御座いましよう。彼等は故郷に老いたる父母を遺して來たのであります。中には既に子あり妻ある者もあるのであります。彼等には又た弟もあり、姉妹もあるのであります。然るに此の頼みとせる子を失ひ、夫や父を失ひたる遺族の悲みは、如何なるものでありましようか。到底言葉には盡す事は出來ないので御座います。彼等哀れな遺族の中には、貧に迫りて乞食となるか、然らざれば死するより外はない者もあります。然らば、彼等兵士には何の惡い事が

あつて、斯る悲慘なる樣に陷つたので御座いましよう。若し彼等に惡しき事がありとすれば、そは彼等か身體健全にして、心丈夫なる子たり、夫たりしが爲めであります。何と、悲慘の極ではありませんか。併し此悲慘の事實は、實際死んだ兵士を眼前に見たる時、最も深く感じるのであります。

勝利の報來たる時には、人々歡んで之れを迎へます。けれ共、夫れと共に、其代償として多くの人命を失つた事を、考へて御覽なさい。殊に死傷者の内に吾々の知己友人抔かある時には、如何でしよう。實に何とも云へぬ感が起つて參ります。私は時々此慘劇の事を思ひ病ひましては、常に人智の生して以來多くの賢者が思ひを凝らしたる、宗教及び哲學上の問題即ち人生觀に心を勞したので御座います。そして遂に私一個の人生觀を發明いたしました、けれ共、猶ほ何時も戰爭の慘果を思ひ出しては、心を痛めさるを得んのであります。勿論私は必らずしも悲觀をする譯ではありませんが、私か心の底には人間の運命を支配し、宇宙を動かしつゝある、其の力に對して、何とも云へぬ畏怖の念を禁じ難いのであります。人間の命は何故斯樣に廉いので御坐いますよう。何故鉛の飛丸に對抗する事が出來無いのでしよう。何故水も溺らす事か出來ず、火も燒く事か出來ない樣に、作つてないのでしよう。息あり血ある間は、人間は實に貴しく、利己的計畫陰謀を逞ふするに餘念のない時には、人間は實に高慢らしく、神の如く何時迄も永生きして居るが如くに見へますけれ共、悲しい哉、一度其の夢醒めて現に入るや、又た見る影もないのであります。即ち花崗石とセメントで作つた城岩に向つて進み、鐵と戰ひ、人間自身の手で作つた火藥の破裂の中に入つて、粉の如くに碎かれて、其の影だに止めぬのである。あゝ思へは人間程脆い者ない、とは人間の運命の墓なき事を思ふ毎に、浮ひ出る念であります。

併し又た振返つて考へて見ますれば、人間は單に斯る物質的、肉體的、肉慾的以外の高尚なる事の爲めに作られたのではありますまいか。人生の意義は、朝露の如き墓なき命を以て居る有情動物、以上にあるのでは御坐いますまいか。吾々は單に五官にて知る事か出來る以上の事か、出來るのでは御坐いますまいか。或は又た智覺、肉情の此の世界以上の或る所に住んで居るのではありますまいか。私は之れ等の疑

問に對し、斷じて「然り」と答へるのであります。人生は風前の燈の如く、墓なき者ではありますけれ共、猶ほ單純なる肉體的存在以上の者であります。吾々の手や足は、取られ、腦は地に塗れ、骨は粉と碎かるゝも、吾々の思想は猶ほ活き、行は猶ほ存し、感情は猶ほ殘つて居るのであります。人間か生死するは、唯だ感覺と、智覺の上より見たる事であつて、吾々の眞の實在の住む所には、生もなければ、又た死もなく、精神界に入れば、吾々の生命は、永久に生ひ、無窮に茂りて、常に其發達を止めんので御坐います。肉は腐りて土に還るも、人間の爲したる高尚なる、行と、思想よりなる其の精神は、常に益々生氣を增す事、猶ほ蛇が皮を脫いで、益々成長すると同樣であつて、蛇が皮を脫くは即ち人間の肉體か死するのと同じ事なのであります。肉體が如何に成ろうが、そんな事は精神の關せざる所で御坐います。精神は肉體の主であります。肉體は唯其命の儘に從ふへきものでありまして、精神は何時でも自己の思ふ儘に、其外皮を更へるので御坐います。一層委しく言へは、不滅、不朽なる精神は、肉體の狀態に隨て、種々己れを變化發達せしむる爲めに、自ら制限して肉體の中に宿つたものでありまして、肉體は精神の天職を完からしむる必要はありますけれ共、又た精神の命の儘に、其意思を行はねばならぬ樣に、作られてあるので御坐います。東洋の神話の中に、斯云ふ事かあります。昔しアラビヤの沙漠に、一羽の非常に美しき鳳凰が居りまして、五六百歲となつた時には、香料と香しき護謨とで火葬の塔を作り、自ら羽打ちして之れに火を付け、美妙な聲を出して鳴きつゝ、自分も此火に燒け、更らに新しき若き鳳凰となつて生れ來たり、前の生涯を續けたと申ます。斯く永劫の生を保つ鳳凰も、驚くべきではありますけれども、更らに驚くへきは、人間の精神的生涯であると思ひます。楠正成が七度人間に生れても南朝を護らんと申ましたのは、日本人の皆な知る所でありまして、廣瀨中佐か其最期にのたり、同じ意味の詩を作つた事も、亦た皆樣の御承知になつて居られる所であると存じます。併し實際に於ては、此等の偉人は單に七度人間と生るゝ位ではなく、宇宙の存する限り、生れ更るのであります。斯く言へばとて、私の申上る事を、單に理論のみであつて實際何等の意味かない者だと、御考へに成つてはなりません。吾々は今日にても猶は兩偉人の

精神を呼吸しつゝあるものであつて、それが即ち兩偉人が生れ更つて居るのに外ならんのであります。加之、今後生れて來る人間も、亦た兩將の精神的子孫となると同時に、吾々の精神は又た彼等に於て存續するので御坐います。生れ更れると申しますも、決して死んだ人間が、生返つて來るのでも、乾き切たる木乃伊が息を吹き返すのでもありません。靈魂の不滅と云ふ事は、決して世人の考へて居る樣な、個人の靈魂が永存するのでは無い、精神は決して見たり、感じたりする事の出來る者ではなく、空間や時間の制限をも受けず、因果の法の束縛をも受けぬ者でありまして、高尚なる感情起り、美しき思想を抱き、献身的の事をなしたる時、其所に精神は各人の心に表はれて來るので御坐います。宇宙には唯一の大なる精神がありまして、個人は唯だ一時的に之れを表顯するに過ぎんのであります。人間が此大精神の意を行ふた時には、永劫の命を得、無智と自我の念によりて此大精神に反いた時には、直ちに亡びます。肉體上の存在は、猶ほ筍の皮の如き者で御坐いまして、竹の成長するに隨て、漸次に之れを去るの必要があるのであります。併しそれは皮たる肉體が、等閑に付すべき者であるか、爲めてはなくして、竹たる精神が一層大切であつて、其完全に成長する事が大事であるからであります。故に吾々は肉體の存在に絶對的重きを置かず、必要ある時は、直ちに之れを捨つべき者であります。私は斯くてこそ始めて人間存在の精神が、實現せられるのであると存します。故に若し目的さへ正しく、名譽ある事であり、高尚なる理想を維持、實現するが爲めであり、人道、文明の進歩の爲めであるならば、戰爭は必ずしも恐るべき者ではありません。如何に多くの人命は失はれても、如何に多くの人を苦しめましても、一層廣き眼孔より見ますれば、恰も前に述べました鳳凰が火に燒けて、再び新しく清き鳥となつて生れ來たり、益々其榮光を放つのと同じ事であります。まして彼等の體内に在りました靈は、今や其子孫の身體によりて發揮せられ居るので御坐います。戰場に斃れたる兵士等の身體は、土に歸りて草木を肥し、野犬の腹を肥やすに過ぎませんけれ共、是れは只た各々の肉體の上より見た事であります。又た人間の精神は決して所謂天に昇るのでもなく、多くの天使に事へられて居る、在天の父の側に參りもせず、又た幽靈となりて、空

間に消へ去りも致しません。佛教徒は斯る迷信をなす者でなく、眞理と事實とを求むる者で御坐います。實際吾々が見まするのは、逝きたる人々の靈が、吾々自身の内に在る事で御坐いますイヤそれには吾々の心の底に動かす可らざる證據があります。吾々は彼等兵士の勇ましき事を聞き、熱心にして献身國家を愛した事を聞きます時には、屹度心を動かし、如何にもして彼等の後を繼いで、彼等のした事業を完成せねはならぬと云ふ決心を生じます。それが即ち彼等兵士の靈が吾々の所に來て、吾々に宿つて居る證據であります。個人としては彼等死して最早此世の人でないと申す事は、誠に嘆かはしい事であります。げれ共、一層高き所より見れば、彼等の死んだ爲めに、吾々の生涯は益々光を放ち、益々榮へるので御坐います。故に靈魂の不滅と申す事は、精神的生命の不朽(個人としてにあらず超個人的に)を意味する者である事が分ります。生命は個人より個人に入りて、常に個人の身より出入致しますとは云へ、生命は猶ほ絶へず他の肉體の中に入りて、益々若かく、益々強く、益々高尚に成る者であつて、此意味に於て、日本人が祖先の靈を信仰するは、道理ある事と申さねば成りません。吾々の祖先は決して過去と共に消へ去つたのではなく、益々元氣よく吾々の中に存在して居るのであります。而して吾々の崇拜するのは所謂彼等の亡魂でなくして、其活きたる精神であります。日露戰爭にて斃れた將士は決して死んだのではなく、其の知己崇拜者の心情の中に、生存して居るので御坐います。感覺の世より永劫に去りたる彼等は、新たに超個人的世界に於て、無窮の住居を見出し、骨は碎けて土となるも、精神は猶ほ吾々の心の中に、生存して居ります。此單簡なる事實を信する事の出來ぬのは、彼の物質的利己主義にのみ汲々として、人生の意義を知らんとはせざる近眼者輩の事と存じます。

私は戰爭が恐ろしくないと申すのでは御坐いません。戰爭は地獄の樣な者である事は、百も承知をして居りますからして、出來る限り之れを避け、國際間の爭は成丈け一層文明的なる手段によつて、解決せねばならぬと存して居りますが、併し若し避くる事が出來ない時には、全心を傾けて戰ひ、身は死しても、必ず子孫か自己の爲した事業を完成して呉れるであらうと云ふ決心を以て、進まねばなりませぬ後に

遺りし吾々は徒らに悲しむが如き事をせず、彼等の名を汚さず、其事業を完からしめ以て吾々の爲めに死んだ人々の靈を慰めねばならんと存します。

二百二十八

23/10/40

明治四十年四月十八日印刷
明治四十年四月二十一日發行

閑葛藤奥付
定價金七拾五錢

纂譯者　東京市赤阪區青山南町七丁目九番地　河上哲太

發行兼印刷者　東京市京橋區日吉町四番地　渡邊爲藏

印刷所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

不許複製

大賣捌所

東京市神田區駿河臺御茶水橋　光融館

東京市芝區露月町　鴻盟社

東京市麻布區赤羽橋　森江佐七

63.

324
32

324
32

019394−000−4

324−32

閑葛藤

宗演／述

M40. 4
ABG−0095